

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

|  |                        |       |  |
|--|------------------------|-------|--|
| 論文提出者  | 東田 一仁                  |       |  |
| 論文審査委員   | (主査) 朝日大学歯学部教授         | 堀田 正人 |  |
|  | (副査) 朝日大学歯学部教授         | 山内 六男 |  |
|  | (副査) 朝日大学歯学部教授         | 裕 哲崇  |  |
|  | (外部審査) 東北大学大学院文学研究科准教授 | 坂井 信之 |  |
| 論文題目   |                        |       |  |
| ヒトの心理状態が歯の色彩認知に及ぼす影響   |                        |       |  |
| 論文内容の要旨  |                        |       |  |
| <p><b>【目的】</b></p> <p>自身の歯の色彩と理想の色彩との間にギャップを感じている患者は、新製する歯冠修復物により白い色彩を希望するとのいくつかの報告がある。しかし、この先行研究では、患者の心理状態や患者が歯科医療に対して知識を有しているかどうかについては、十分な検討がなされておらず、自分自身の歯の色彩の認識や新製する歯冠修復物の色彩の決定に、患者の心理状態や歯科医療に対する知識がどの程度影響するのかを検討することは、歯冠修復学上も有意義であると考えた。そこで、本研究では、特に歯科医療に対する知識を有しない一般女子大学2年生と歯科医療の教育を受けた歯科衛生士専門学校2年生を対象として自分自身の歯の色彩認知と実際の色彩及び新製を希望する歯冠修復物の色彩との違いを検出するために測色するとともに、性格特性や心理状態との相関関係が成立するか否かを検討するため、心理学的検査を行い、これらについて検討を行った。</p> <p><b>【方法】</b></p> <p>実験に関する十分な説明を行い、文書による同意を受けた20代の一般女子大学生57人と歯科衛生士専門学校生61人の合計118人に対して、心理検査として、矢田部・ギルフォード性格検査(以下YG検査)を行った。次に、自分自身の歯の色彩をどのように認識しているかを人工太陽照明灯(SERIC社製 SOLAX 100W)下で、VITA社製シェードガイド(VITA classical)から選ばせた。さらに、歯冠修復物を新製するならどのような色彩を希望するかも同様に選ばせた。</p> <p>選択されたシェードガイドと被験者の歯の実際の色彩は、松風社製シェードアイ NCCを用いてL*a*b*値で表した。得られたデータは、「自身の歯の色彩の実測値」と「自身の歯に対する被験者の主観的色彩」の色差値「実際とのギャップ値」、および「新製を希望する歯の色彩」と「自身の歯に対する被験者の主観的色彩」の色差値を「希望とのギャップ値」として処理し、以下の実験を行った。本研究は、朝日大学歯学部倫理委員会の承認(承認番号22096号)のもとに行った。</p> |                        |       |  |

1 一般女子大学生における心理検査値と「実際とのギャップ値」および「希望とのギャップ値」との関係

一般女子大学生における心理検査値（特に、抑うつ値と劣等感値）と「実際とのギャップ値」および「希望とのギャップ値」の間に相関があるか否かを検討した。

2 歯科衛生士専門学校生における心理検査値と「実際とのギャップ値」および「希望とのギャップ値」との関係

歯科衛生士専門学校生においても実験1と同様の検討を行い、実験1の結果と比較検討した。

3 実験1および実験2の被験者のうち、抑うつ値と劣等感値の高い者間での比較

一般女子大学生と歯科衛生士専門学校生の被験者から、抑うつ値および劣等感値の大きい者から降順に並べ、この値が、上位15位に入る者の間での、「実際とのギャップ値」と「希望とのギャップ値」との比較を行った。

#### 【結果】

1 一般女子大学生は、「実際とのギャップ値」と「希望とのギャップ値」とともに YG 検査の「抑うつ値」や「劣等感値」との間に有意な正の相関を見せた（順に、 $r=0.303$ 、 $r=0.378$ 、 $r=0.344$  および  $r=0.331$ ）。

2 歯科衛生士専門学校生では、YG 検査で「抑うつ値」や「劣等感値」のいずれも有意な相関関係はなかった（順に、 $r=-0.107$ 、 $r=-0.021$ 、 $r=-0.109$  および  $r=0.039$ ）。

3 一般女子大学生と歯科衛生士専門学校生の YG 検査「抑うつ値」の大きいそれぞれ上位15名間を比較したところ、「実際とのギャップ値」は、両学生間に有意差があった（ $p<0.05$ ）。また、「劣等感値」の大きい上位15位の者の間の比較では、「実際とのギャップ値」と「希望とのギャップ値」との両方に両学生間で有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。

#### 【考察】

歯科医療の知識を持たない一般女子学生においては、YG 検査における「抑うつ値」や「劣等感値」が高い者ほど、自身の歯の色彩を「実測値より暗く黄色い」と思い込み、自身の歯に対する被験者の主観的色彩より「白くしたい」と願っていることが明らかとなった。しかし、一般大学生における相関は、歯科衛生士専門学校生においては、有意な相関は認められず（実験2）、歯科医療の知識によって抑制されていることが示唆された。また、歯科衛生士専門学校生の抑うつ値や劣等感値の高い上位15名を抽出して検討した場合は、自分自身の歯に対する被験者の主観的色彩の認知や新製を希望する歯冠修復物の色彩に影響を与える可能性があるものの、その影響は、一般女子大学生の場合よりも低く抑えられていることを明らかにした。

#### 【結論】

心理的に抑うつ傾向や劣等感の強い者は、自分自身の歯に対する被験者の主観的色彩をより暗く思い込み、歯冠修復物の新製を希望する場合は、より白い色彩を選ぶことが明らかになった。また、この傾向は、歯科医療の知識によりいくらかは抑制される可能性も明らかとなった。